

週刊ダイヤモンド 今週の一冊

北村行伸

平成 17 年 2 月 7 日号

「私は、産みたい」

野田聖子(著)

新潮社 2004年12月5日刊

現在、少子化問題があちこちで議論されているにも関わらず、直接出産に関わる不妊治療についてはあまり触れられてこなかった。

実際に、日本で不妊治療をしているカップルは47万組いると言われており、生殖医療の進歩によって、以前であれば不可能と思われていた妊娠・出産が可能になってきた。具体的には、近頃年間に生まれる赤ちゃんの数は110万人前後であり、そのうち、体外受精で生まれているのは1万人強である。すなわち、生まれてくる赤ちゃんの1%は不妊治療の結果生まれてきているのである。

ところで、不妊治療はあくまで個人の自由な選択として行うものであるという考え方から健康保険の対象外となっている。一回あたり20 - 40万円の治療費を繰り返し払えるカップルは限られているというのも現実である。

このように実態が知られることの少なかった不妊治療の体験を現職の国会議員である野田聖子氏が勇気を持って綴ったのが本書である。本書の最大の意義は少子化対策の一環として不妊という障害を取り除く手助けを政策のレベルで考えてもいいのではないかということにある。

また、これに関連して生殖補助医療法案が今国会で議論されようとしていたが、国会議員の関心は低く、意見の一致も見られていない。このような現実に対しても、本書はいくつかの問題提起をしている。不妊というデリケートな問題に対して、患者の心のケアなどまだまだ改善すべき点があることも明らかにされている。

生殖医療に関しては、代理母出産の禁止、兄弟姉妹間での精子や卵子の提供の禁止、不妊治療は婚姻届けを出したカップルのみを対象とする、など議論の余地があるルールが不妊治療をさらに困難なものにしている。実際、欧米では医療技術の進歩に対応して、はるかに自由な選択肢が与えられており、倫理上の問題もより現実的に議論されている。

なぜそんなに無理して子供を欲しがるのかという疑問もあるかもしれないが、本書は不妊治療が生命や人間の尊厳を再考する契機になっていることを示唆している。